

## 令和2年度第3回 犬山市総合教育会議 会議録

日時：令和3年2月8日（月）午前10時

場所：犬山市役所 5階 503会議室

### ◆出席者

市長 山田拓郎

教育長 滝 誠

教育委員 教育長職務代理者 奥村康祐 委員 田中秀佳 委員 小倉志保  
委員 堀 美鈴 委員 渡邊智治 委員 木澤和子

### 事務局

#### 【経営部】

鈴木経営部長

企画広報課

井出企画広報課長

小枝統括主査

村瀬主査

#### 【教育部】

中村教育部長

矢野子ども・子育て監

記録者 企画広報課 小枝統括主査

傍聴者 0名

### ◆欠席者

アドバイザー 県立犬山高等学校 校長 祖父江泰治

県立犬山南高等学校 校長 森也寸司

### ◆次第

- 1 開会
- 2 あいさつ
- 3 議題  
不登校について
- 4 自由討議
- 5 その他
- 6 閉会

## ◆会議要旨

## 議題 不登校について

## 【主な意見】

- ・生徒全員とつながるという観点から、ローカル5Gの活用について教育委員会で話をしていきたい。
- ・不登校への対応について、教員の資質を向上させることも一つの方法。
- ・色々な勉強方法、教育手段・方法を提供することも大事。
- ・指導側に不登校の実体験を持った人を1人でも多くみてもらうと多くの生徒が救えるのではないか。
- ・不登校になったときには連携が大事。学校との連携が見えてくると良い。
- ・不登校の子の親に寄り添う。経緯を話せる場所、集まりがあると先に向かうことにつながるのでは。
- ・なぜ犬山市で不登校が多いのかを確かめる必要がある。
- ・子どもが困ったときに、話に行ける場所を知らせることが大事。
- ・担任の先生だけでなく、いろんな人を見る必要がある。
- ・不登校は、100人いれば100通りの個別事情があって、それぞれに対応しなければならない。
- ・検証をして対策を考えていく必要がある。
- ・「不登校を減らす」、「不登校にさせない」をスローガンは間違っていて、結果として子どもが幸せであればそれで良い。
- ・過去の議論等を踏まえて教育委員会で話し合っていく必要がある。
- ・教育関係者（校長会、教頭会、教員代表、PTA、保護者、生徒）が集まって話し合いをする場を設定しても良いのではないか。
- ・犬山市も子どもの権利を保障するという観点で条例（子どもの権利条例）を作ってはどうか。
- ・現場で不登校の対応がきちんとできていないのであれば、行政としてどういう対応をするのか考えていかなければならない。
- ・授業の人数は多いが、クラス担任が見る子どもの人数を減らす、ということも考えられるのではないか。
- ・不登校だった子が、今、どうしているのか追跡調査ができないか。
- ・親がどう思っているのか、不登校の子どもが何に困っているのかを分析したい。
- ・学校の様子が分かるだけでも、子どもも親も安心する。
- ・昼に出かけて、人に見られていろいろ言われることが嫌な子もいる。夜に行く教室を作ってはどうか。
- ・不登校にはいろいろ原因があるが、環境の変化がストレスになってしまうことがある。
- ・環境が変わるときのケア、親や子どもへの情報発信があると良い。
- ・ストレスをためない。自然に戻っていける環境づくりができると良い。
- ・教育委員で分析をして、必要な施策をご指摘いただきたい。
- ・不登校が増えている原因は「不登校を減らす」、「不登校にさせない」というスローガンは間違っている、という考えが広まり、不登校に対する理解が深まったからではないか。
- ・学校現場としては、学校に来て欲しい。学校は努力しているが、なかなかそれが結果に結びついていないという悲しい現実がある。
- ・お互いが「何をしていけるか」、「何をしていかないといけないのか」というスタンスで考えないと解決に向かうことは難しい。
- ・いじめは不登校に入る前のところで、子どもの気持ちが聞ける場が必要。
- ・子どもと親のどちらかだけをやっていてもいけない気がしている。

## ◆会議録

司会 (井出企画広報課長)	<p>定刻より少し前ですが、皆様おそろいですので、令和2年度第3回犬山市総合教育会議を開催いたします。</p> <p>開会に合わせて、1点お願い申し上げます。</p> <p>本日の会議は、犬山市総合教育会議運営要綱第4条に基づき、公開とさせていただいております。あわせて、インターネット映像配信サービス「ユーチューブ」での中継も行っておりますことを、ご了承ください。また、新型コロナ対策として、11時頃に5分間、換気のため休憩をとりたいと思いますので、よろしく願いいたします。</p> <p>それでは、始めに山田市長からごあいさつを申し上げます。</p>
山田市長	皆様、おはようございます。
全員	おはようございます。
山田市長	<p>緊急事態宣言下ということもありまして、感染者数は減少傾向ではありますが、医療機関の状況は依然としてひっ迫した状態で、なかなか気を緩められない現状ではないかと思えます。特に学校関連のコロナの確認が続いて、心配される状況もありましたが、なんとかみんなで気を付けて抑え込む方向へ向かっていけると良いなと思っております。皆様のご理解をいただきたいと思えます。その中で、皆様には総合教育会議にご出席いただきましたこと、感謝申し上げます。</p> <p>今後、コロナのワクチン接種が順番に進んでいきます。私どもとしても、着実に準備をしながら、社会全体で感染が収まる方向に、国・県・市が連携して取り組みながら、早く平常な日常に戻ることを期待していますが、まだまだ流動的な面もあるかと思えます。いずれにしても、色々な機関と連携をとりながら取り組んでいくことに尽きると思えますが、そういったことも含めて、ご理解いただきますようお願いして、私からの冒頭の挨拶とさせていただきます。</p> <p>よろしく願いいたします。</p>
司会	続きまして、滝教育長、ごあいさつをお願いします。
滝教育長	皆様、こんにちは。
全員	こんにちは。
滝教育長	<p>年度末でご多用の中、高等学校から祖父江校長先生、森校長先生、卒業、入試を控え、お忙しい中ご出席をいただき誠にありがとうございます。</p> <p>冒頭、市長からも話がありましたが、コロナによる緊急事態宣言が3月7日まで延長されました。感染者数は減少傾向にはありますが、重症者や亡くなる人がぐんと増えていることが心配なところです。今後の状況によっては、3月7日を待たずに緊急事態宣言が解除される都府県もあると聞いておりますが、感染拡大防止と経済活動の維持を両立させることは本当に難しいのだなと改めて感じております。こうした中ではありますが、東京オリンピック、パラリンピックの実施の可否について、森会長の発言が国内だけではなく、全世界に大きな波紋を広げております。これまで、国の重要なポストにある人が、不適切と思われるような発言によって辞任をするということが度々ありました。あらためて、「口は災いの元」。それから、昔から「賢者は多くを語らず」と言います。言葉を選んで、言葉を大切に慎重に誤解を招かないように発言をしないといけないなと改めて感じているところです。</p> <p>先週の2月3日に、立春を迎えましたが、寒い日が続いていると思えば暖かい日</p>

	<p>がやってくる、今この時期が俗にいう「三寒四温」という時期かと思います。1月から2月にかけて用いる、冬の季語のようなもので、もう暦の上では立春ということですので、この三寒四温という言葉は、暦の上ではもう過ぎ去った言葉になると思います。季節的にも、コロナの終息に向けても、一日も早い春がやってくることを願っているところです。</p> <p>今回は今年度最後の総合教育会議です。どうぞよろしくお願いいたします。</p>
司会	<p>資料の確認をさせていただきます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次第</li> <li>・名簿</li> <li>・参考資料 不登校児童生徒数の推移</li> </ul> <p>以上となります。</p> <p>それでは、議事に移らせていただきます。これ以降は、要綱第3条に基づき、山田市長に議事進行をお願いします。</p>
山田市長	<p>それでは、私の方で進めさせていただきます。</p> <p>本日の議題は「不登校について」となっています。資料もありますが、事前に資料をご確認いただいていると思いますので、さっそく意見交換をしたいと思います。</p> <p>いきなり、「さあ発言どうですか」という形になりますけれども、お互い不登校の問題については、ある程度のことは把握しているかと思いますので、いきなり意見交換をしても良いと思います。この問題について「こういう事があったらどうだ」、「こういう事が課題で、ここをこうカバーしていった方が良い」、そういう意見、問題提起があれば、率直にご意見をいただきたいと思います。ご意見、ご発言がある方は挙手をお願いいたします。</p> <p>はい、奥村委員。</p>
奥村委員	<p>不登校について色々調べたこと、思うところをお話させていただきたいと思います。</p> <p>不登校というのは参考資料に出していただいているように、年度ごとで出ているので、結局は「結果的なもの」です。文科省が出している不登校の数値等も年間30日以上 - 長期の休みなのかどうなのか違いがなかなか見えてこない。犬山市では、このコロナ禍で、昨年度の不登校の子を見て、リモート授業が終わった後かなり出席率が上がったという非常に良い成果が出ているのかなと感じています。ただ、ひとえにそれで解決していくということでもないと思います。</p> <p>いろんな不登校の人にも話を伺いましたが、実際に児童生徒が学校に行きたくない原因について、親御さんでも半数近くの人が分からないという現実で、なかなか掴めていないということも多いと思います。だからと言って、「学校に来なかったから良い」という訳でもないのです。私はGIGAスクール構想の「ひとり残さず救い上げる」という構想は非常に重要なところだと思っています。</p> <p>短期的にできること、長期的にできること、二つあると思いますが、短期的というものは、生徒全員とつながるという部分に関して、ICTがすごく有効だと思います。その有効な部分で一つ提案があるのが、これは教育委員会で皆さんと話をしていきたいと思いますが、文科省ではなく、総務省が出している「ローカル5G」の活用が教育現場にも向けてあります。第5世代の通信システム、5Gを使うと、学校のみならず市全体、企業とかいろんな面での情報のやり取りが、今まで以上にスムーズに違った使い方ができるので、これを検討していただきたい。例えば、タブレットを1人1台配布した家庭に電波が飛ぶようにルーターを渡す必要がなくなり、学</p>

	<p>校とのやり取りもスムーズになる。はっきりとは出ていませんが、現状の4Gでは、一気に通信量が上がったときに止まってしまうということが、5Gではなくなる。できればそういうものが市全体で活用できると、他にも企業とかインバウンド、今はコロナ禍でそういうものが使えませんが、そういったものにも有効と考えました。</p> <p>あと、多くの「色々分からない」という児童生徒に対して、どういう風に先生が対応していくのか。数値として、中学校でいくと犬山市は「4.57」、ほぼ25人に1人、20人に1人＝1クラスに1人、もしくは2人、必ず不登校がいる。教員は、必ず100%不登校に対応することができないといけない、ということになってしまうと、教員の負担にもなってしまいますので、そういったものへの対応に対して教員の研修というか資質を向上させることも一つの方法だと思います。その中では、インクルーシブ教育を考えていく一長期的に多くの色々な生徒をどのように一緒に学んでいくかということへの教員の資質も大事だと思っています。それだけではなくて、犬山市全体として、一つのクラスー今まで当たり前だった先生が目の前にいて、生徒が全員みんな同じ方向を向いて勉強するというのではなく、色々な勉強法、教育の手段、方法を提供することも大事なかなと思います。</p> <p>最後に、今、不登校で非常によく見ていただいている清長先生。ああいった不登校の実体験を持った人が、教えるということは、相手ー不登校の生徒の気持ちが分かる。不登校だった先生はやはり少ないと思いますので、「なんで不登校なのか分からない」ということも非常に多いかと思えます。そういった実体験を持った指導側の人を、1人でも2人でも多くみていただくと、多くの生徒が救えるのではないかなと感じました。以上です。</p>
山田市長	ありがとうございます。
滝教育長	今の奥村委員のご発言は、次のステップー現状を見て、不登校を少しでも減らしていくためにはどうしたらいいか、という内容かなと思います。この資料がもしかすると誤解を招くかもしれないと思いました。国、県、市とあって、次にABCDとありますが、このABCDは、市内の4中学校とは全く関係ありません。近隣の市町です。その点、付け加えさせていただきます。木澤委員は、これまでお仕事で関わっていますよね。どんなふうに関わっているのでしょうか。
木澤委員	<p>不登校という問題はすごく大きなカテゴリーで、現実はいろんな要素を含んで不登校。当事者であったり、親、例えば適応指導教室「ゆうゆう」だったり、そうしたところとの連携はどうなっているのか。なんとなく踏み込んではいけないという状況なのか、そうではないのか、見えてくると良いかなと思います。また、お母さん方もいろんな情報が耳には入るようですが、自身で確かめている人は少なく「こうやって聞いたから」となりがちです。そこを「こんなふうだよ」と不安を和らげるような場所であったり人が増えていくことで、不登校の減少につながらないかと感じました。不登校になると、親を責めたり、親も「責められている」という気持ちが強いので、それを「そうではないんだよ」と言うのではなく、「それもあるかもしれないけれど」と認めることで、そこからどうしていったら良いか寄り添う。「寄り添う」とは簡単そうで、作業としては難しい。その人の持つ資質もあるので、学んだだけでできるとは限らない。そういう人に出会った人達は、違うと思います、もう少し現状が分かる。不登校と一つにしてしまうのではなく、「どうしてだろう」、「どうしたら良いのだろう」と経緯を話せる場所であったり、集まりがあると、先に向かうことにつながるのではないかと思っています。</p>
山田市長	はい、ありがとうございます。他にご意見ありますか。

堀委員	<p>先ほど、滝先生にも「どうして犬山は多いのだろうか」という話をしましたが、「なぜ多いのか」を確かめる必要はあるのかなと思っています。他と比べて、同じことで、多い、少ないが出ている訳なので、その原因は確かめる必要があると思います。「不登校」と言うと、言い方が良くないかもしれませんが、「不登校にならないようにする」と、「不登校になったらどうするか」という2つに分かれると思います。どういう言い方が良いのか分かりませんが、まず「不登校にさせない」。この間聞いたのは、姉弟がいて、4年生の子が「もう学校に行きたくない」と言った。そうしたらお姉ちゃんが「スクールカウンセラーに相談すると良い」と言ったそうです。「どのように相談すれば良いの？」という話になって、お母さんもお父さんも含めて、色々な話になったようなのですが、子どもが困ったときに、普通に話に行ける場を一多分ちゃんとやっているとは思っているのですが、きちんと知らせることが大事。担任の先生が全て責任を持つのではなくて、いろんな目でその子を見るということが必要な気がします。ですので、その子が困ったらどうするかということ、みんなで見る目が必要なのかなと思いました。学校では、先生はとても忙しいので、子どもが気軽に相談できる人が入ると良いのかな。どのよう立場になるか分からないですけど、入っていただくと良いのかなと思いました。</p> <p>不登校になったら、連携が大事だと思います。いろんなところがあることは知っていますが、一体どのようにつながっているのか、その人達がどのように話し合っているのか、ということがあまり見えてこないで、そういうところも分かると良いのかなと思いました。</p>
山田市長	<p>ありがとうございます。他によろしいですか。</p> <p>はい、田中委員。</p>
田中委員	<p>木澤委員、堀委員の話聞いて、私も同じような思いです。</p> <p>合計数だけを見ても子どもの実態は分からないので、例えば、数だけを見ても10年くらい前からデータの平均が国や県を上回り出した。このデータ自体は教育委員会の中で示されたことがあります。各学校、各家庭、子ども毎で、不登校も100人いれば100通り個別の事情があって、それぞれに対応をしていかなければいけない。だから難しいということがあると思います。従前の個別対応ができていたのか、やはり検証をして、対策をどうすればいいかを考えていく必要があると思います。10年間くらいの膨大なデータがある訳ですから、もう一度掘り下げていく作業を教育委員会でやっていかなければいけないと思っています。</p> <p>ただ、ここで確認をさせていただきたいのが、「不登校を減らす」とか、「不登校にさせない」というスローガンは間違っていて、結果として子どもが一番幸せな状態 - 幸福追求権と言うのでしょうか、不登校であっても子どもが幸せであればそれで良い訳です。ただ、学校に来ないことで幸せが得られるのではなくて、当然、学校は子どもの幸せを保障する場所なので、そういう状態になっていないから学校が変わらなくてはいけません。では学校がどうすべきかということで考えていかなければいけないと思いますので、「不登校にさせない」、「不登校をどう減らしていけばいいのか」という議論についついなりがちですけど、それは絶対やめなければいけない。例えば、数値目標を「不登校をゼロにする」というスローガンではなく、あえてスローガンを掲げるのであれば、「全ての子ども達が幸せに学習権が保証されている」とか、「教育を受ける権利が保証されている」というようなところで考えていかなければいけないと思います。私が着任</p>

する以前から教育委員会で議論になって、議論の積み上げがあるのであれば、私にも教えていただいて、その上で教育委員会で話し合っていく必要があると思います。あとは、他の委員がおしゃっていたように、現場の状況です。それを私は全く知らない状態ですので、慎重に話していかなければならない。

そのためにはどうすれば良いのか。例えば、この総合教育会議もたくさんの人が参加して話し合いをしている場ですけれど、校長会、教頭会、教員代表だったり、PTAだったり保護者、場合によっては生徒を呼んでも良いかもしれませんが、そういう教育関係者が集まって話し合う場というものを、設定しても良いのかなと思います。そういう自治体もあります。権利保障というところでは、教育委員会で条例を作りましたけれど、他市町を見ていると、子どもの権利 - 権利条例というものが作られている、作られつつある。例えば、本市も子どもの権利を保障するという観点で条例、指針の様なものを作っていく。登校に直接対応するというところからはかなり本筋から逸れますけれども、前提として大枠を考えていくということが、総合教育会議で議論できる場所かなと思います。

もう一点、これも教育委員会でもう少し議論を詰めていきたいところなのですが、教員です。個別対応がきちんとできているか。結果として学校には来ていないけれど子どもは元気です、というところまで教員がコーディネートすることが、できる現場の状況なのか。教員の話聞いていて、不登校対応が一番時間も労力もかかる、作業なのだろうと。学校に来ない子を相手にするーいない子を相手にするというところまで、苦しいことはないと思います。「現場は不登校の対応をきちんとできていない」という意見があれば、それは行政として対応をする。どういう対応をするのか、というところを考えていかないといいませんので、そここのところ、機会があればと思います。教育だけでなく、学校現場でも福祉の側面が教員に強く求められているので、不登校の対応、先生の連携という話がありますけれども、連携するにしても、学校の先生がソーシャルワーカーだったり、スクールカウンセラーだったりの橋渡しをしなくてはいけないので、なんにしても学校の先生がコーディネーターの役割を担わないといけません。コーディネートするための先生の時間的余裕、精神的な余裕が果たして十分なのか。犬山市の先生達はどう思っているのか。そこを聞いてみたいと思います。

本市の場合、少人数学級、少人数指導という優れた取組がある訳で、これは不登校対応に意味があると思っています。中学校では少人数指導、前回の教育委員会の中で、例えば中学校の少人数学級、クラスを増やしてみたらと思うのですが、クラスを増やすと先生の担当コマ数、授業コマ数が増えるので、逆に仕事が増えてしまうという矛盾した状況があると伺いました。そうであれば、授業と担当クラスは別に1対1で対応させる必要はない訳で、例えば少人数指導というのは、クラス人数は多いけれど、数学とか英語の時は人数を少なくする。指導で少なくするというのを中学校ではやっていますけれども、その逆もあり得るのではないかと思います。つまり、授業の人数は多くても良いけれども、クラス担任が見る子どもの数を減らしておく。例えば15人ずつにするとか、そうすることによって、福祉面 - 子どもがどういう状況か、保護者がどういう状況か、30人を相手にするよりも15人の子どもあるいは保護者を相手にきちんと取り組む方が、学校現場としてはしっかり対応できるだろうと思います。例えば少人数指導だけではなく、あえてクラスは細かく区切っておいて、授業は、多人数であることが適切だとは思いませんけれど、少人数学級を増やしていく、ということも考えられるのかなと。ですから、不登校ということだけを議論するのではなく、おそらく

	<p>少人数学級に変わっていくのでしょうし、「ゆうゆう」の対応にも関わってくるのでしょうし、最終的には個別のことを見なければ、どうすれば良いのかという方策は見つからないのかなということは考えているところです。</p> <p>また、10年間くらい若干平均の数値より高いですが、大事なのは事後です。不登校だった子ども達は、今どうしているのか。そういうところを是非調べられる範囲で、追跡調査みたいな聞き取りができれば良いのではないかと。中学校、小学校に行っていなかったけれど「きちんと勉強やっています」ということなのか、ここで学校に行けなかったことが後々人生になんらかのネックになってひっかかる場所があるのか。行政組織ですから調査もできないかなあと思ったところです。以上です。</p>
山田市長	<p>はい。ありがとうございます。</p> <p>順番に小倉委員。</p>
小倉委員	<p>少し感覚的ですが、不登校について考えたとき、不登校という現状が一次的な場合と、二次的な場合があるなと思います。</p> <p>一次的に不登校で、家とか親に問題がある場合と、本人に問題がある場合、本人の周りに問題がある場合に分けられると思っています。家と親 - 金銭的なことであつたりDVであつたり、生活環境が問題である場合があるかなと。本人のことで言うと、学習面と人間関係面に分かれて、学習面では「遅れてついていけない」とか「学校に行くのが嫌だ」、または「嫌だから行きたくない」。学習障害と言われる、算数はできるけど英語が全くできない、得意不得意が偏っているとか、勉強の仕方が違う子達がついていけないとか。</p> <p>人間関係のことで言えば、友達関係がうまく結べないことが嫌で行けない。2番目は先生や学校に信頼が置けないとか。3番目に本来持っている個性として人間関係がうまく掴めないという子ども達がいる、それぞれが枝分かれして、不登校の原因は色々あるだろうと思います。今、不登校と呼ばれている子達が、何が原因で困っているのかを分析をして、「ではこういう手当てをしていこう」、「こういう手段があるかな」というものを見つけてあげられるような、何に困っているのかを見つけてあげたいなと思います。</p> <p>親が学校や先生に不信感を抱いて「行かないでも良いよ」と親が切っている人もいるのでしょうし、「行かせたいけれど、どうしていいかわからない」、「私の育て方が悪かったかな」、「私の考え方が悪かったのかな」とか整理しきれない気持ちがあつたり、「どう学校や先生とどう付き合ったらいいかわからない」という本当にどうしていいかわからなくて困っている親もいれば、子どもに興味がないではないですけど、「本人が行きたくないなら行かなくていいよ」、「あなたが行きたいなら行けばいいよ」と子ども任せにしている親というものに別れるかなと思います。それぞれアプローチの仕方が違うと思うので、その辺は親がどう思っている、子どもが何に困っている、それを分析したいと思います。</p> <p>「適応指導教室」という名前が前からすごく気になっていて、適応指導教室の説明のところで「学校に戻るための」という一文があつて、気になって取ってもらつたりとか、検討してもらいましたが、ゴールとしては一人一人の良いところを見つけて、一人一人が自信を持って、自分の進むべき道を見つける、それが仕事になる、社会に貢献できるということがゴールで、学校に行かなくても良いよというのはそこだと思いますけれど、それを見つけてあげるところが、犬山で言う適応指導の「ゆうゆう」であつて欲しいなと思うし、学校であつて欲しいなと思います。「ゆうゆう」のあり方も少し考えたいですし、国が決めているのが「適応指導教</p>

	<p>室」という言い方ですが、犬山もそれで良いのかな、もっと優しい表現の仕方にしたらそこに子どもが来ないかなと思ったりしました。勉強したいけれど、学校に行きたくないからできない子を拾って、ネットが使えるようになったということは大きいキーワードになると思うので、それで授業をしていくことはできると思います。人間関係で困っている子達は違うアプローチをしていかないといけないので、「学校に行きなさい」、「「ゆうゆう」に行きなさい」ではなく、違うアプローチが必要だと思うので、何で困っている子が多いのかを知りたいのと、親へのサポートをしたいなと思いました。以上です。</p>
山田市長	<p>ありがとうございます。では渡邊委員。</p>
渡邊委員	<p>昨日電話した友達の子が不登校でした。その子の原因は、ちょっとした友達とのいざこざがスタートで、そこから小学校の後半、中学校は学校行事には行っていたが、学校は行っていない。では勉強はどうなのと言うと、プリントとかそういう対応をされていた。今、ちょうど高3ですけれど、高校は皆勤賞 - 1日も休まずに行っている。そして大学受験をする。「なんで？」と理由を聞くと、不登校になった子達なりのプライドがあるみたいで、勉強はしたい。学校も本当は行きたいけれど、その子の場合は、干渉されるのが嫌ということでした。</p> <p>親としたり、学校がどうなったら良いのかと言うと、これから1人1台のタブレットとなった時に、学校の様子が分かるだけでも、子どもも親も安心する。後ろにビデオを置いてクラスの様子を配信するだけでも安心する。無理に呼び戻そうとかではなく、自然な形で直そうとなっていく。彼らは勉強もしたい。学校行事はその子全部行っているの、彼ら自身の思い出作りとかもさせてあげたいとなると、子ども達が学校に戻る、学校に行きやすい環境づくりというものを考えていくと良いのかなと思います。それがデジタルの世界でも良いですし、可能か不可能かは分かりませんが、先ほど「ゆうゆう」の話がされましたが、明るい時間に行こうとすると城下町を歩いていかななくてはいけない、そうすると人に見られて「なんであの子、この時間にここにいるの」と言われるのが嫌でなかなか行けないということもその子はあったみたいです。実際、昼間、子ども達が学校にいるときは、家でおとなしくしているけれど、夕方5時を境に急に活動的になると。子ども達が遊ぶ時間、塾にいる時間に動くのであれば、夜、教室に行く場所を作るとかを言われていました。不登校は色々な原因があって、私自身が子ども達を見ていて思っているのは、環境の変化、よく言われるのが中一ギャップというのがある、中学校に上がるときの環境の変化。点数だったり、偏差値で急に順位付けされてしまう。心の準備がないまま、小6から中1になったときに、1ヶ月くらいで中間テストがあり、それがストレスになってしまうというのが、子ども達を見ているとあることです。小学校から中学校に上がるときの、例えば1日入学だけではなく、もっと日ごろからの連携などがあると良いなと思います。小学校と中学校の先生の連携。少ないと思いますけど、保育園から小学校に上がるときの変化。環境が何か変わるときのケアというのが、学校間の連携だったり、行政の教室とかセミナーではないですけど、親への情報発信、子どもへの情報発信というのがあると良いのかなと。友達の子どもの一例でしかありませんが、ストレスをためない。あとは自然に戻っていける環境づくりということができると良いなということのを思いました。以上です。</p>
山田市長	<p>ありがとうございます。一巡したので、私から意見を出さしてもらいます。基本的に皆さん共通しておっしゃっていたところなので、ここは一緒だと思いますが、不登校も全部個別に背景も事情も違うので、つまるところ個別の事情に応じた対応と選択肢を設けていくかということです。相談の間口も多様な間口を設けていかな</p>

いといけない。対面が良い子もいれば、対面ではない方が良い子もいて、アプローチすることすらそれぞれ違う。それぞれ違うことに対して、いかに既成概念に捉われない間口を設定できるかを問われていると思っています。そのあとのフォローアップもそうです。先ほど「ゆうゆう」の話がありましたが、「学校に戻る」という前提に立つかどうかです。その子の状態によっては、「戻らなくていいんだよ」と言ってあげることも必要かもしれない。「戻らなくていいから何もしない」ということではないので、勉強をフォローするための環境として、民間のいろんな取組も含めて、いろんな多様な選択肢があると思うので、オーダーメイドの対応をせざるを得ない。そういう事だと思います。学校の現場でそれがどれだけできるのかということになると、きっと限界もあると思うので、「対応をするための体制はどういう体制が必要なのか」ということは現場と一緒に考えていけない。「ゆうゆう」も上手くもう少し柔軟な発想に立たないといけないと思うし、その連携をもっと幅広く考えていかないといけないという感じは持っています。

もう一つは、タブレットですけれど、私はタブレットが導入される時に、この会議でもお話をさせていただいて、タブレットが入ることは、最大限活用すべきです。先ほどの多様なフォローアップの方法、多様な間口ということからすると、莫大な予算を使ってGIGAスクールであてがわれたタブレットを活かすという一つのテーマとして、不登校の問題にとってこのタブレットは非常に有効なアイテムだと思います。

田中委員が言った「不登校ゼロ」は目的ではないので、やはり学校が楽しいところ、行きたくなる場であることが重要だと思いますので、勉強ができる、できないは別にして、友達と会いたいというのでもいいですが、行きたい場所であるということが非常に重要だと思うので、より良い学校を作っていくことが結果的には不登校を減らしていくことにつながっていくと思うので、目標設定はそういうことで良いのかなと思っています。

それから、全部個別に事情が違うという話とかぶる話かもしれませんが、常に数字は全体の数字ではなくて、個別の傾向を捉えていく必要があると思います。皆さん定例教でやっているのかもしれませんが、全体の総数の内訳が何なのか。単に不登校と言っても、全部個別の事情があるとは言いつつも、大まかなカテゴリーに分かれてくると思います。その傾向をつかみながら、この傾向の子ども達はこのカバーをすれば、少なくともこのカテゴリーのものは減らせるのではないかと、そこは見えると思います。常に分析をして、そこで必要な施策は何を求められるのかを、是非教育委員の皆さんで分析していただいて、「こういうことが必要ではないか」、「こういうことを犬山としてやるべきではないか」ということをご指摘いただければと思います。私もそういう目線で分析したいと思っています。きちんとデータに基づいた施策を組み合わせることが大事です。

それから、先ほど田中委員がおっしゃった事後検証は非常に重要で、私は不登校の問題に限らず、国語教育の時に口を酸っぱくして言いました。今、犬山は国語力を軸足において、国語教育日本一を目指そうとやっていますが、犬山に限らず日本の教育の仕組みを議論していくのに、中長期的な検証に立っていない。ゆとりが良いとか悪いとか、その教育の制度の下に育った子ども達が、大人になった時にどういった状態になっているのかというのを、きちんと数値的に分析しているのか。不登校の問題に限らず、犬山の教育の仕組みの中で育った子ども達が、いったいどういう傾向になっているのかという後追いというのはできるのであればやっていった方が良い。どういう検証のやり方があるのか、「俺はそんな後のことまで答えたく

ない」という子がいるかもしれないけれど、できることならそれはやるべきだと思います。手間がかかっても、PDCAを回していくことが絶対大事だと思います。これは絶対不可欠。ですので、申し訳ないのですが教育委員会としても事後検証のチャレンジはしていただきたいと思います。私もそういうことを求めていきたいと思えます。

それから最後に、この件と直接関係ないのかもしれませんが、田中委員が触れられた、意見交換の場です。不登校のことでもそうですが、教育委員会基本条例というのは、教育委員会は積極的に思考と行動をする、積極的に考えて行動をする、そういう教育委員会であるべきだということが一番重要なポイントです。考えて行動するというときには、当然教育分野における政策形成をしていく訳ですけど、それが皆さんのセクションで行われる訳です。教育委員会というのは政策形成機能を担っている訳で、政策を形成していく上では、重要なのは現場の意見を聞くことです。それは先生の意見を聞くだけではありません。いろんな当事者がいます。その当事者の意見を聞く機会を、きちんと条例の中に位置づけしてあります。場合によっては、不登校の親 - 意見交換に出てこられる人、出てきたくないという人もいます。そういう当事者の意見を聞く場を色々設けることは非常に重要だと思います。今回、制服にブレザースタイルが加わりました。私が教育長にはずいぶん前からお願いしていたのは、「単に「制服」という部分だけで、終わらせては駄目です」と。「この機会に1回、学校の運営、環境の中で、LGBTも含めたことについて、何か不都合なことはないのか総点検して欲しい」という話をして色々考えていただいていた。やっぱり、その過程で当事者の意見を聞かないといけない。教育長にそういう人と面談をしていただいて、直接そういうお話を聞いていただきました。そうすると「なるほどな」と思う事がいっぱいあります。その当事者でないと、わからないんです。田中委員のおっしゃった、意見交換の場を設けていくというのは、その時も「意見交換の場がない」と言っていた人がいました。自分達の意見を聞いてもらえる場がないと。教育委員と意見交換の場って、年1回設けています。委員と一般的な意見交換の場「教育委員と語る会」を設けています。設けているけれど、そういう意見を聞いてもらえる場がないという意見が出るということは、届いていない。なので、全員が認知をまだしていないかもしれませんが、頻繁にはできないでしょうが定期的に少なくとも年1回程度、「今年はこのテーマでやろう」、「今年はこの方々の意見を聞こう」とか。今までは「この日にやるから誰でもいいから来て」というみたいな感じでした。そういう形も良いですけど、何かテーマを決めて、そういう当事者と意見を交わすということも、私はありではないかと思えます。そういうことは私も応援しますし、私は市長として直接いろんな人の意見を聞くようにしますけれど、是非そういう機会は設けていただくと良いと思えます。

色々私なりに申し上げましたけれど、さっき言ったように、分析をして、それに対して「こういうカバーが必要だね」、「こういう体制が必要だね」、そういうことは、必要なものは私も応援していきますし、予算措置が必要なら我々も考えます。是非皆さん、そういう視点で教育委員として、何が必要なのか見ていただいて、ご指摘いただければと思っています。私が思っている必要なのは私の方で措置します。そういうことをまた継続してやっていけたらと思います。よろしくお願ひします。

一回りしましたので、何か皆さんの方で付け加えておっしゃりたいことありますか。滝教育長

滝教育長

平成17年度から、17・18・19・20・21は私が以前にここにお邪魔をしていた時代です。ちょうど犬山の教育が全国的に脚光を浴びて視察が頻繁に訪れたときです。その時に私が申し上げたのは、犬山の少人数学級、少人数授業は不登校を作っていない。少人数学級、少人数授業が不登校を減らしているという説明をしていました。ただこれが、年を追ってずっと見ていくと、次第にその数が犬山に限らず全国的に増えている状況です。この原因が何かということ様々ですが、私は、田中委員がおっしゃりましたが、「不登校を減らす」とか「不登校にさせない」というスローガンは間違っているという考え方が比較的あちらこちらに広まったからだと思います。私が子どもの頃は、病気でもない、ケガもしていない。学校行きたくない人はずる休み。親も子どもが学校に行かないときは、無理にでも学校に行かせる時代でした。それが変わってきた。これが良いのか、本当なのかどうか、私は不登校に対する理解が深まってきた結果なのかなと思います。確かに、学校に行くということは目的ではないと思っています。子ども達が将来幸せな生活を送るためには、集団生活もしなくてはならない、勉強もしていかななくてはならない。基礎的なことを学ぶ場が学校であって、必ずしもそれが学校でなくても良いのではないかという人もいらっしやる。でも、本当にみんながそういう理解であれば、無理に学校に行かせなくても良いと思います。

ただ、学校現場の先生達は、来て欲しいんです。先ほどから色々学校現場に対するお話も出ましたが、皆さんが考えていらっしゃる以上に学校は努力しています。毎月1回、「いじめ・不登校対策協議会」を開いて不登校の現状、そして今、何をしているのか、今後何をしていけばいいのか、検討をし、手を打っています。でもなかなかそれが結果に結びついていかないという悲しい現実があります。これについて、子ども達は、先生には言えないけれど、学校以外の人になら話ができる。例えば、担任の先生や教科の先生は実際に評価をするので、自分の言ったことが評価に影響をしないかという恐怖心が子ども達にはあるものですから、養護教諭の先生だとか、教科担任、学級担任以外の先生には、チラチラと本音を漏らすことがあります。そのために、学校には学校関係者以外の人に入っていただく。例えば、奥村委員がおっしゃったように、清長先生が、今、学校現場に行っていていただきます。今年から「ゆうゆう」の担当者達が、不登校の家庭を回っていただいています。あるいは学校現場へ行って、学校は何をした方が良いのか、ゆうゆうとしては何が出来るのかお互いに連携を図って少しでもこの子達が学校へ行けるような方法を考えています。ですから、学校へ行くための適応指導教室です。「ゆうゆう」が設立された目的は何か。不登校の子が少しでも学校に行けるようにするということが適応指導教室の目的です。ですから、もし小倉委員がおっしゃるように、学校へ行くことを目的とせずその子達の居場所だけ作れば良いということであれば、「ゆうゆう」の設立の目的を変更するか、あるいは別の施設を作ることが必要になってくると思います。

私が考える一番大事なことは、「学校はもっとこういうことをするべきだ」、「ああいう事をするべきだ」、「教育委員会はもっとこういうことをするべきだ」ではなく、お互いがお互いの立場で「何をしていけるのか」、「何をしていかないといけないのか」というスタンスで考えないとこの問題はなかなか解決に向かうことは難しい。色々皆さんのご意見は参考になりましたので、学校現場とも協議をしながら、私は不登校の子達は、少しでも学校に行けるように、個人的にはしたいなと思っています。これは、間違っている、お互いに考えが一緒でなくてはいけないという訳ではないので、現場にいた人間ですからそういうことを思ってしまう

	<p>すが、そのために学校現場と協議をしながら、子ども達の将来のためにやれることはやっていきたいと思っています。</p>
山田市長	<p>はい、木澤委員。</p>
木澤委員	<p>この間、新聞で「引きこもり」についての連載を読みましたが、その多くはやっぱり不登校、いじめの事例が多かったです。その中で、いじめというものは、不登校になる以前に子ども達の気持ちが聞ける場所が必要かなと思いました。</p> <p>2点目ですが、何年も前からアドボカシーというものに関心があって、ここ何年か学ぼうとしています。さっき田中委員がおっしゃった子どもの権利のところ、子どもの気持ちを子どもに変わって伝える人、アドボカシーは必ずしも専門家でなくてもよくて、研修を受けた人が子どもとの信頼関係を築き語り出すことが大事な気がします。そのような場ができてくると、不登校の数を減らすのではなくて、自然に生きていくことが楽しかったり、「学校に行きたい」と思えるような子どもになってくれないかなと思います。子ども達が遊んでもっと話せる場ができれば良いと思います。学校に対しても、市役所とも関わらせていただいたから、「こういうところはこうなんだよ」と説明ができる。字面で言うのではなくて、「こんなに良いところがあるんだよ」と伝えられることで、お母さんは、背中を押してもらったような気持ちになって、「行ってみるわ」ということがいくつかあります。</p> <p>子どもの権利を言いながら、もう一つは親のところに関わる両輪がないと、どちらにも力を注がなければいけない気がしています。やっぱりお母さんが意見を話せる場を設けて「あそこに行ってみよう、聞いてもらえるよ、しゃべれるよ」という場所がもっと増えたら、自然と不登校は減るのではないかと感じました。</p>
山田市長	<p>ありがとうございます。追加でもし発言があれば。</p> <p>では皆さん、活発にご意見をいただきありがとうございます。現場はもちろんよく頑張っていると思っています。ただ、固定観念に捉われないことが大事だと思います。私も学校は行った方が良いと思うし、それを押し付けることもありませんが、私も行きたくないときは我慢して行って、我慢して行ったことが今の自分になっています。あそこから逃げていたら、きっと今の私はなかったと思います。だからと言って、今の子に我慢を強要させるとかではなく、極端なことを言うと、我慢をさせたことで、自ら命を絶ってしまう子だっているかもしれない。そこが非常にデリケートな問題だと思います。全てのケースが全て背景が違うので、できるだけ固定観念に捉われずにやっていく中で、先ほど申し上げた、どういう施策が必要なのか。どういう体制が必要なのか。その必要に対して、私も応援したいと思っています。皆さんで議論していただいて、今日の議論も定例教などで、いろんな現状に応じた議論をやっていただいて、対応をしていけたらと思います。とにかく、現場で携わっている皆さんが、そういう個別の事情に対応をされていると思うので、そういうことを応援できるようにしたいと思います。よろしくお願いします。</p> <p>皆さんから一通り意見をいただきました。アドバイザーとして、祖父江先生と森先生に来ていただいております。高校においても、こういった問題もあろうかと思っていますし、また高校の立場から何かアドバイス、ご意見、もしあればご発言をいただきたいと思っています。</p>
祖父江犬山高等学校長	<p>私は学校の間人ですので、学校の立場から感想を述べさせていただきますが、先ほど滝教育長がおっしゃられたように、やはり学校には来て欲しいと思います。学校は素晴らしいところですし、学校には感動があります。学校に来ることで成長で</p>

	<p>きることは計り知れないと思いますので、できれば学校に来てもらいたいという気持ちがあります。</p> <p>さて、本校は定時制もあります。定時制には多くの不登校の生徒が入学してきます。その中で、急に皆勤に変わる生徒も数多くいることも事実です。本当に不思議だなと思うこともあります。色々考えますと、一つは、周りに自分と同じような人がいる、ということもあるでしょうし、本校の定時制は一クラスしかありません。英語、数学、国語、理科、社会、体育という教員から入れ替わり授業を受けます。全教員が一人一人の生徒と関わります。そういった、よく言えば「寄り添う事ができる」と言うのでしょうか、全教員が一人一人を見ることができるという環境も影響があるかもしれません。でも何よりも、高校に進学をして、環境をリセットできるということが大きいのではないかと思います。ただ、それだけではなくて、先ほど申しました件、周りに同じような子がいる、全教員で一人一人を見ることができ、そういうところも多少なりとも影響があると思います。そういうところに不登校解消のヒントがあるのではないかと思います。</p> <p>不登校には本当にいろんな原因があります。小倉委員がおっしゃられましたように、家庭に原因がある生徒もいれば、本人に原因がある生徒もあります。本人に原因があるということと言えますと、例えば勉強嫌い。これは私どもも反省しないといけないと思います。生徒が興味を持ち自ら学ぶような、そういった授業にしなくてはいけないという点では、学校が本当に努力をしなくてはいけないと思います。ただ、一番多いのは、対人関係トラブルです。特に高校の場合は、ほぼこれです。対人関係トラブルが本当に多い。例えば、それまでクラスのリーダーとして頑張っていた子が、本当に些細なことで友人関係で躓いてしまって、急に来られなくなるということがあります。それまでリーダーであった子がです。「まさかあの子が」という子がちょっとしたトラブルで学校に来られなくなることがあります。それを思いますと、今の若い子は人間関係作りが少し苦手である、あまり得意ではない子が多いのではないかと感じたりしています。そのためにも、人間関係作りのトレーニングと言うと言葉が悪いと思いますが、小さいうちから人との関わりの体験をすることが私は大切ではないかと思っていて、一番の基本はそこではないかと考えております。以上です。</p>
山田市長	はい、ありがとうございます。森先生、何かあれば。
森犬山南高等学校長	<p>「学校に来て、みんなで楽しく学ぼう」というノリが私も大好きです。なかなかそうは上手くいかないという現実から、教員は生徒に対して、保護者に対してもそうですが、気を遣い、時間を使い、「ここまでよくやるな」というくらいやっています。それが現状です。そんな中、カウンセラーさん等の力も借りながら、カウンセリングをしてもらったり、本人や保護者から、そういう生徒を抱えている担任や教科担当もカウンセリングをしてもらいますが、本人や保護者の中には、「外部の人だからこそ嫌だ」、「あなたはいったい何者なの？」と意図的に心を閉ざす。では教員なら開くのかというと「それも嫌だ」。そういう生徒や保護者が結構な数います。</p> <p>そういうところで、その次の突破口は何かということでは非常に頭が痛いところです。少人数で細かく生徒の面倒を見ていきたいというところではありますが、教員の定数が授業のコマ数で決定されるという現実がある以上、ある教員だけ授業のコマ数をうんと減らして、そういう生徒対応にあたる、ということはいわゆる標準法みたいな法律がある以上、なかなか難しいのが現実だと思います。「ICTの力をどう使うか」ということで、私達の学校でもタブレットが配布されます。学校によ</p>

	<p>ってはBYODで生徒の私物を使うというような環境になってきています。市長もおっしゃったように、「いろんな生徒と直接、間接でつながる絶好のタイミングだろう」、「やるなら今だ」、「これを逃すと、次のタイミングはないかもしれない」と私は強く思っていますので、それを使って授業を変えていく。生徒とどうつながるかということも一気に変えていく、なかなか反発も多いのですが、強力に進めていく必要があるかと。うちもそうですが、ソーシャルスキルのトレーニングを総合的な探求の時間、ホームルーム等の時間に組み込んで、徐々に、自分と他者がどうつながるか、あるいはつながらないのか。どこまで分かり合えて、どこから分かり合えないのか、というところも含めて、少しずつ積み上げていく。「それを学校でやるべきか」というご意見も多分あるかと思いますが、現実はその通りです。少しずつ対応していくしかないと考えています。なかなか頭が痛いところではあります。</p> <p>ご意見、ご指導あればお願いしたいと思います。以上です。</p>
山田市長	<p>はい。大変参考になる意見をいただいたと思います。いったんこれで休憩に入りたいと思います。</p>
<p>&lt; 休憩 &gt;</p>	
山田市長	<p>はい。では再開させていただきます。議題は終わりました、自由討議ですので、なにかこの機会にご発言をお願いしたいと思いますが。いかがでしょうか。特に無いようですので、自由討議はここで終わらせていただきます。その他って何か事務局からあるんですか。</p>
事務局	<p>はい。次回の会議についてです。今年度の会議は今回で終了となります。次回は令和3年度になりますけれども、会議の詳細については、年度明けに日程、議題等の調整にお伺いしますのでよろしくお願ひいたします。以上です。</p>
山田市長	<p>はい、今日の次第にある項目はこれで終わりましたので、これをもちまして、令和2年度第3回犬山市総合教育会議を閉会とさせていただきます。</p> <p>皆様、本日は、誠にありがとうございました。</p>
<p>&lt; 閉 会 &gt;</p>	